

# 幼兒に聽かせる話の實際

(夏期講習會に於ける速記)

久留島武彦

四八

話し方の講習云ふもの程ジレンマに陥り易いものはないのであります。これは實際問題でありますから、この、お話が出来なかつたならば……たゞ理論を覺えて置く云ふだけでは何の役に立たない。同時に私が此處で話して居る間にこれを聞かせ得なかつたならば話し方の講習の講師としては落第であります。所が丁度暑い時に遠くから朝早くお起きになつて此處に御出でになる。話の間には多少お睡くもおなりになるだらう。

その心持のいゝお顔を拜見するのは私には光榮でありますけれども、これは私の講習から言つたならば要するに話し方の落第であります。であります上に、私の頂いた時間が僅かに二時間、僅に二時間で如何に語るか云ふ事は、萬金丹の效能ではないけれどもこれはおしが強いのであります。それでありますから、申上げる事は略々、大體斯う云ふ様な心掛けで話云ふものに向ふべきが正しいのではなからうか、云ふ様な概念的な事を申上げるに過ぎないと思ふのであります。出来るだけ實際問題に觸れまして其の間に實際を引き度いと思ひますが、何うか貴女方が左様な立場にある私に御同情下さつて、この概念の中から、當嵌る實際的な問題をお引出しを願ひ度いと思ひます。

先づ私は、話云ふ事を貴女方にお考へ願ひ度い。「一寸今日は貴女方が指導者だから今日の記念日のお話をなさつて下さい」斯う云ふ事を園長或は主事からお頼みをお受けになつた時に、貴女方の中で「よう御座います」「直ぐ引受ける方があるではありませんか何うでありますか。大概の人は「私お話は難しいわ」云ふ。唱歌の指導なら出來

る、遊戯の指導なら出来るがお話をしろと言はれる。大概な者はこれに二の足を踏む。これは十人が殆き十人でありませうが何故でありませう。何うしてそんなにお話云ふものに二の足を踏まれる。その危懼躊躇の考が湧くでありませう。こゝで貴女方に伺つて見度い。「立つて下さい」と言ふ。貴女方は造作もなくお立ちになるでありませう。「手を上げて下さい」と申上げる。「右の手です」直ちに右の手を上げるでせう。「上げたまゝ左の手を横にお上げ下さい」上げるでせう。「右の手を前にお向け下さい。これでぐるつとお廻り下さい」廻るのは造作なくお廻りになるでせう。然るに「一寸手を上げて横に出して一廻り踊つて御覽下さい、一寸手を動かして踊つて御覽下さい」と言ふ。「私踊る事は出来ないわ」と言ふでせう。同じ事であります。手を上げて前に向け、手を横にして下に向け、ぐるつと廻る。誰にも出来る事ですけれども、踊る。こ云ふその踊る形が違ふか、…違はないのであります。違はないのであるに拘はらず、踊る。こ云ふ言葉を使つた時には直ちに躊躇し、一つ々々それと同じ条件を並べた時には遠慮なくやる。もうちつと簡単な事を言ふならば、「ステージの上を歩いて御覽下さい」と言ふ。誰でもする。それを「踊り乍ら廻つて御覽下さい」。こゝで直ちに顔を赤らめ或は身を退ける。話云ふものに對してもさう云ふ感じはありますまいか。「お話をなさつて御覽下さい」と斯う言ふ。話云ふものにも貴女方は一つの犠牲觀念がある。何か間違へた一つの捉はれた考がありやませぬか。そのくせ貴女方は生れてから一日も話をしない日はないのであります。朝起きてから夜寝る迄、一人でない限りは必ず話をされて居るのであります。然るに何故「話をなさい」と言はれた時にそれを難しい事考へるか云ふのは、何か貴女方に、子供の前でする話、他人の前で際立つてする話云ふものゝ解釋に何か捉はれた觀念があまりになりはしませぬか。これを私は先づ考へて見る必要があると思ふ。

それは何であるか。話云ふものを、踊る。こ云ふ言葉と同じ意味に藝術的表現の下に現はす話、或は身體の動き云ふ

様な捉はれた觀念がおありになるのじやないか。話を以て藝術の所産——藝術の産む所——さう云ふ様な考が貴女方におありになりませぬか。それであるから、話をするに云ふには藝術的にやらなければならぬ、美しくやらなければならぬ、調和が取れて居らなければならぬ。さうしてそれが全體に一つの纏つた出来上つたものでなければならぬ云ふ先入主……或は一つの既成觀念に云ふものがおありになりやませぬか。これを一つ御自分で御自分の心にお尋ねになつて見るに、大慨然らずに仰言る方はありますまい。何故左様な捉はれた考で話にお向ひになるか。私は此所に一つの誤つた動機があると思ふ。それは、今日迄話と言はれて語り續き言ひ續げる、……或は話として貴女方が御解釋なさる所のものは、世界の民俗を超越し、國土を超越し、時代を超越して、何處で話しても、誰に話しても、何時話しても差支ない様な話が段々く選り分けられ、或は残された一つの共通な形を持つたものがある。これを、貴女方の頭では話と解釋して居られるのではないか。子供の聞き度い話は、その時代を超越し國土を超越し民俗を超越して共通の形を持つた話を話と解釋する他には、子供の求める話は他にはない様なお考を持つていらつしやりやしないだらうかと思ふのであります。それは、共通の形に申しますに、貴女方が古い話を既によくお讀みになつて御覽になるに、東洋の話にも西洋の話にも一つの共通の形に云ふものがある。或は東洋だけの話の中にも一つの形がある。同じ形、同じ心の動きがある。例へば日本で申しますならば癩取りの話であります。あの癩取りの話は、山の中で正直な親父が木を伐つて居る中に夕立で雷が激しいので大きい木の洞に逃込んで雨を避けて居る間にいゝ心持でぐつすり寢込んで了つた。眼が覺めて見るに夜になつて暗闇で山を下りる事も出来ないので夜明を待つて居るに、鬼がやつて來て踊つた。それが大變面白い。それでそのおじいさんは面白くなつて、自分もつひ飛出して踊つて了つた。鬼も喜んで「明日の晩やつて來い。お前の様な者が一人加はるに興味が深いから明日も一緒に踊らう。それには、人間は嘘をつく。何か來る約束を置いて行け」云ふので癩を取つて預

つた。これに對して心良からぬ年寄が、その事を聞いて、俺が代りに行つて瘤を取つて貰はうと云ふので、行つて、かへつて瘤をつけられた。これは誰も御承知でありませう。所が朝鮮に同じ形がある。たゞ日本では山……人間ならざるものゝ住む處を考へて居るが、朝鮮では古い空家であります。これが色々の化物の居る處とされて居る。日が暮れて道が分らなくなつたので空家に這入つて休んで居るに夜中に化物が出て踊つた。その男は歌を歌つて居るに、その化物が「大變面白い。お前は何うしてそんなに上手く歌へるか」と言ふので、「この瘤が歌袋でその中に歌がある」「それならば寄越せ」、「やられぬ」と言つたが無理矢理に取つた。それを聞いた怒張りの親父が翌晩行くに「あれをつけたが、歌へない。そんな嘘を言ふ者にはもう一つ瘤をつける」「昨日取つた瘤をつけられた」と云ふ話であります。所がフランスの西北の海岸ブリットンと云ふ處に同じ形がある。東洋ではこれが瘤であるのに西洋では何儘であります。あつては醜い、無いと姿が清らげに見えるに云ふ……何儘であるのも瘤があるのも同じであります。東洋には象皮病が多く西洋には何儘が多いと云ふ事も自然に分ります。兎に角樵夫が木を伐つて居るに、サンデーマンデー……日曜月曜……歌ひ乍ら踊つて居る聲が聞える。谷を窺いて見るに山の小人が手を繋いで輪をかいて踊つて居る。あまり面白くなつたからその樵夫は何儘であつたがその中に加つて踊つて居るに「面白い明日も来い」と言つてせむしを取つて預つた。するにその同じ村に怒張りの何儘が居つて、俺が行つて取つて貰はうと云つて谷底に行くに、今日は山の上で踊つて居る。上に上つてサンデーマンデーマンデーと云つたが、何時迄経つても何とも言はない。それで、いゝ加減に取つて貰ひ度いと思つて、火曜水曜……と言ふ非常に怒つて「餘計な事を言ふから面白くない。餘計なものをやれ」と言つて、何儘を取つて載せたから身體が二つに折れる様になつた。これがフランスであります。これが又アイルランドの田舎にもありまして、若者が買物に行つて草臥れたから休んで居る中に眠り、眼が覺めるにつきしるが上つて居る。さうして踊の聲が聞えるので行つて一緒に踊り何儘を取られ

た。翌日これを聞いた者が行つて、矢張り昨日の尙僕をつけられた。皆同じ形であります。斯う云ふのは或は傳つて来たのか、兩方とも偶然にあるのか、心正しき者は身體に災があつてもそれが自ら除かれ、心邪しき者は、災の上に尙ほ災を附加へられる云ふ心の働きは同じ形になつて現はれる。

それかと思ふに又歴史の上或は傳説の上に現はれたものを御覽になるに、英雄、偉人、特殊なる人は必ず水の上に浮いて流れて来る。これが多いのであります。第一、日本の桃太郎は桃の中で水の上に流れて来たのをお婆さんが拾ひ上げた。何處から来たか分らない。これはお伽噺であります。所が西洋の歴史物語の中の一つの、エジプトのあのナイルの河に、葦のみきを組んだ舟……小さい箱舟の中に流された子供がモーセになつて、これがイスラエル民俗の爲の大きい力になつて働いた。それかと思ふにイタリーのローマを拵へた所のロミアスマーマス云ふ子供は、ダイバ河に流れて狼に銜へられて穴の中で育てられた。これが今日のローマを建設した。

斯う云ふのを調べて御覽になるに臺灣の一番初の人も朝鮮の初の人も皆海の上に浮んで流れた云ふ人が偉い人間で、國を開き民俗の運命を司つて居る。何うして斯う云ふ様な形が出来るのでありませう。

またさう云ふ形を並べるに、貴女方の近い所で澤山あるのは、お伽噺の中には三つ云ふ數を必ず使ふ。これ亦一つの形であります。三人の兄弟、三つのりんご、三番目、それが段々進んで来て所謂數に對する觀念の進みは文化の進みであります。その文化の進んだものは、七つ八つ云ふ……西洋では七つに次で十二云ふ數が現はれて居る。日本でも八つ云ふ數が彌益々の彌で、これが八つ云ふ數に現はれる。八咫の鏡、八束の垂穂、八岐の大蛇、八巻云ふ様な工合に八つ云ふ數が多い數の代表になつて現はれる。

それかと思ふに、必ず賢い者が子供の中では失敗する。さうして馬鹿な奴が必ず成功する。兄弟三人あれば先の兄二人

姉二人は失敗して、一番末の鼻垂しの馬鹿さ思はれる妹、弟が成功する。貧乏人が成功して金持が失敗する。美しい言はれた者が失敗して醜い者が後にはより以上の美しさを現はす。

又、今日は存在を許す事が出来ない立場に迄迫つて来て居ります一つの形は、女を以て或仕事の御褒美にする云ふ形であります。例へば今日貴女方に、マラソンの一等賞は女高師を出た一番の生徒、言ふならば許されるでありますか。銀のカップの代りに美しい女、こんな事を言ふならば御憤慨なさるであります。所が現實に吾々が子供に話して居る所の多くの話の中に最後の御褒美となり、最後の事を成就した時に握り得て樂しみの材料になるものは美しきお姫様。それが初は美しきお姫様であつたが、文化が進むに隨つて美しく賢い……美しく賢いだけでは満足出来ないから、美しくて賢くて身分のあるお姫様。さうなつて来るミ王様のお姫様になつて、キングスドーター……。これが如何にお伽噺の中心思想、理想の權化になつて居るか云ふに、アメリカの耶蘇教會で處女會を、キングスドーターサイアティー云ふ名前がつけられて居る位で、娘には、キングスドーター云ふ名前がよく響いて居る。所がこれを分解して見ると、或事業、或大きい骨折の御褒美に同じ人間である女が材料として扱はれる、褒美に出される云ふ考であります。これ等も世界共通な形でありまして、これは鎌倉時代に書かれたお伽草紙云ふ書物を御覧になりましたも、西洋の……：こらに轉つて居るお話を御覧になりましたも共通の形であります。斯う云ふ形を御覧になります云ふに、これが子供の聞き度い話……：斯う云ふ様な形になつて残つて居る話が子供の喜ぶ所の話である云ふ貴女方はさう云ふ誤解をなさつて居る様な傾きはおありになりやしないだらうかと思ふ。形になつて残る程でありますから適應性を持つ……：違つた民俗にも違つた風俗にも違つた時代にも適應性を持つ、所謂適者生存であります。適者生存で、さうして民俗、時代、國土、歴史、あらゆるものを超越して何時何處で話しても、誰に聞かせても彼等が喜ぶ云ふ醇化されたものが形になつて多く残るのであ

ります。その醇化されたものは、即ちこれを文學の上から見ると、藝術の所産ミ斯う見られるのであります。一つの立派な藝術品になつて居るのであります。誰が見ても喜ぶ、何時與へられても嬉しい、何んな國にこれを投出されても誰もが飛付くミ云ふ様なものは無條件で藝術品ミ言へるのであります。その藝術品である所のものにのみ貴女方の眼が働く、心が用ひられて、子供の求める話は藝術品でなければならぬミ思ふ様な誤解、錯誤に陥つて居られないだらうか。子供の話は必ずしも藝術品を求めるミは言へないのであります。子供は、藝術品であるからこれを鑑賞しよう等ミ云ふ様な、第三者の立場に立つて物を見るミ云ふ様な程度には達しないのであります。

こゝで私は、子供に話す話ミ云ふものに就ては、先づ話方を考へる前に根本から子供の求める話ミ云ふものに就ての解釋をもう一度見直す必要がある。根本から解釋する必要がないだらうか。この點に就て貴女方が御自分で、話ミ云ふものに就てお考へになつて御覽なさい。指導者ミして何か子供に話さなければならぬミ云ふ様な時に貴女方が求める話の材料は何處かミ云ふミ、大概藝術品ミして纏められた書物の中から探し出さうミする傾きがないだらうか。此所に根本の間違がある。それを土臺ミして私は先づ子供の話ミ云ふものを、如何なるものが子供の話であるかミ云ふ所からこゝに申上げて見度いミ思ふ。

貴女方程子供を毎日お扱ひになつて居る者はないから、少し氣を付けて御覽になるミ材料が目前に轉つて居るミ思ふが、子供は何故あんなに話を求めるのでありませうか。何うしてあんなに一つから二つ、二つから三つ、三つから七つ、七つから十、飽く事を知らない。何故あんなに子供は話を求めるのでありませう。その話を求めるのは滑稽だからでありませう。面白いからでありませう。何うしてあの話に満足するでありませう。こゝで私は貴女方に一々伺ふ事が出来ないから多少自問自答をやらなければならぬが、滑稽だから子供が喜ぶミ云ふ……その滑稽ミ感するのは、子供が滑

稽さ感ずるのか話す人……大人が滑稽さ感ずるのか、私はこれは大人の方が滑稽な話さ感ずるのではないか……。子供は滑稽さ感じて居ない。大人は、突拍子もないものを子供は喜ぶと言ふ。何うしてあんな馬鹿げた途方もないものを子供は喜ぶか。大人は考へて、子供は實に滑稽突梯なるものを喜ぶのであるが、それは大人の解釋ではありませんまいか。子供からは滑稽さは感ぜない。子供が受取る心の態度、子供が聞いて喜ぶ所の彼等の心の動きを貴女方が真面目に御覽になるさ、彼等は決して突飛さと思はれない。それはあり得る事さ思ひます。それは、現實にさう云ふ事がある事さ思つて解釋する。それで、馬鹿げた事さは子供は決して思はない。たゞ大人の眼には餘りにそれが現實さ離れ過ぎて居る、餘りに大きい、餘りに強い、餘りに甚し過ぎる。滑稽さ云ふものの中には斯う云ふものがある。餘りに誇大であり餘りに非現實である。斯う云ふ様なものが大人には考へられる。さうして大人から言ふさ結局矛盾であります。喰ひ違つて居る。斯う云ふ様な事が大人には滑稽さ考へられる。こゝに、面白いこれを補ふ所の一つの材料さして貴女方がお分りになるであらうと思ふものは漫畫、今は漫畫時代さ呼ばれる位、大人の世界にも子供の世界にも漫畫が喜ばれる。何故か云ふさ、漫畫程誇大性に物を扱つたものはありますまい。例へば今の内閣諸大臣を扱ふのに、一寸あるかなきかの黒子が大きく畫かれる。少し顎が四角いさ思ふさ、それが正四角形の顔に畫いてある。頭の毛が少し薄いさ二三本毛がかいてある。所謂誇大性がある。種がないのじやない、特徴がないのじやない。それから非現實さ云ふのは、さうして誇大にして見るさ云ふさ現實の人間さは大分喰ひ違つて見える。これに依て掴ませる材料は他のものさ比べて明かに特異性……非現實さ言ふよりかこれを斯う云ふ言葉で言うた方がいゝさ思ふ。特異性——特別に異つた所の性質をそこに現はす。それさ現在のものさ比べて見るさ矛盾が甚だしい。それに非常な興味を感ずるのであります。であるから興味はこの矛盾性にある。特異性はこれは解釋の基礎、記憶の土臺になるのに一番簡単な遣り口であります。一番分り易いやり口であります。物を誇大に扱



ふ。私がボンミ飛んだ。二米位飛んだ。(手振りにて)これじやあまり飛んだ様に思はぬ。バタ／＼ミ飛んで来てヒョイミ飛ぶ。二三百米ブーンミ飛んだ。するさ如何にも、ブーンミ云ふうなり聲に依て飛んだミ云ふ氣がする。飛んだミ云ふ事がハッキリ現はれて居る。此所に漫畫の價値、漫畫の呼びかける力、漫畫の興味を起す所がある。子供に話す話の誇大性は、以て大人が滑稽に感じ、大人からは非現實、特異と思はれるのは、子供の印象を強く増すミ云ふ上から言うたならばこれは洵に簡單なる印象の強い見方であります。同時に其所に矛盾を感じるから滑稽觀を唆られる。おかしいミ云ふ解釋は、子供は決してこれを誇大と思はない。特異性ミ思はない。子供は盡く現實に解釋するのであります。大人はこれを相對的に考へる。離れて解釋する。大人ミ子供は凡てのものを現實に解釋するミ云ふ立場の相違があるミ云ふ事を土臺に置いて話を考へるミ、子供は、滑稽な話を喜ぶミか面白いから喜ぶミ云ふ解釋は、これは實に無駄な解釋で子供の解釋ではない。而もその面白いミ云ふ理由は何であるかミ云ふミ、子供の面白いミ感ずる理由ミ、大人の面白いミ感ずる理由は違ふのであります。

大分理解つづばくなりましてお分り難いかも知れませぬが、要するに子供の求める話ミ云ふものは、滑稽だからミ大人が感ずる話を求めるのじやない。特に、これが誇大性を持ち、或は特異性を持つから子供が喜ぶミ感ずるのは間違であります。況んや現實ミ矛盾して居る話であるから……ミ考へる如きに至つてはこれは大間違であります。これは寧ろ弊害があります。子供の求める話は何んな話を求めるか。殊に幼稚園の兒童並に尋常一年の子供が喜ぶ話は何う云ふ話を求めるかミ云ふミ、何でもいゝ、何んな話でもいゝ、分りよくすればいゝ。何でも子供の心に合點の行く話であれば、子供の知識の程度、子供の理解力の程度に於て成程さうかミ合點の行く話であれば子供は非常な満足であり、非常な喜びであるのであります。それであるから木の葉の散る話でもいゝ。水の流れる話でもいゝ。或は金魚鉢の中のもの何故ゆらくミ動

いたか、その話でもいゝ。子供の心に浮び上つた材料に子供が注意を向けた時、其所に疑、或は知り度いミ云ふ心を起した時にそれに満足を與へる解説、子供の理解力の程度に依て分らせる、合點の行かせる事の出来る話を彼等は非常に喜ぶのであります。これが殊に尋常三年以下……二年以下の子供の求める話の大體でありまして、殊に幼稚園の話は藝術的製作品であつてはならない。藝術的製作品……世界共通の形の働く話を以て話ミ心得る様な着眼點は根本から改めなければならぬ。何でも話してやる。それであるから、或意味から言うたならば幼稚園の子供に對しては、凡てのものゝ解説凡てのものゝ説明……長い必要はない。子供の混雜を起させない程度に於て説明を加へてやるがたゞこれは子供の分る程度であります。これを根本に入れて置かなければならない。私がよく使ふ材料でありますが五人の男の子を連れた父親が警視廳の前から電車に乗つて櫻田門の側の濠端を三宅坂の方に向つてやつて來た。さうするミお堀に五、六羽の鴨が浮いて居る。其の時に子供が「お父さん、鴨がく、ミく」言ふ。さうして見て居る中に鴨が五羽程竝んで動き出した。「お父ちゃん、それかものお父ちゃん？」と言つた。するミ親父は「馬鹿！それが鴨のおやじか分るか。」これは親父から言うたに無理もない。何處からやつて來たか分らぬ鴨、まさか鴨の戸籍謄本を調べる譯にも行かぬから、それが女房か親父か分らぬ筈であります。子供の聞いた心の立場は何であるか。自己の生活、自己の經驗を基礎としてその鴨が五羽竝び歩くのを見た時に、それが鴨のお父さんだらう、自分達が五人歩く時にお父さんは何處に立つて居るかミ云ふ經驗から來た解釋であります。それで知りたかつたのであります。それであるからお父さんから言ふならば「馬鹿！それが鴨の親父か分るか」云ふのは偽らざる事を言つたのであります。子供に取つては發達する心の働きの芽をつみ切つたものであります。親ミしては落第であります。斯う云ふ時に若し私が親であつたら「さうだね、それがお父さんだらうな」言つて子供ミ共に更に更には鴨の竝びに姿を向け、眼をつけて「一番先に泳いで居るのがお父さんだよ。後から竝んで行くのがあのお

母ちゃんに坊や。だから坊やはお母ちゃんの後にくつゝいて居るだらう、後から行くのはねえ、か他の者が、お伴しませうさちよこくく、附いて行くのだよ」するこ子供は「チョーオチョーオ」云ふのでありませう。子供はあの鴨の戸籍が分つたので満足したのではない。自分の経験で自分の生活にびつたりここれが當嵌つて、成程自分もお父さんは先へ立ちお母さんの横に子供、ねえやは後からだこ思ふ所に満足がある。その鴨が眼についたこ云ふ事は親父の教材としては實に、教材である。所が親が落第したのは「馬鹿！それが鴨の親父か分るものか」。これで鴨こ云ふものが竝んで歩いて居るのから受ける所の子供の教育的な知識こ云ふものは何もなくなつて了ふ。だから鴨を見たならば「馬鹿だね」、馬鹿だね位の解釋しか付かないでせう。

それと同時に貴女方が、何故子供が話を聞き度いかこ云ふ心の動きを氣を付けて御覽になつたならば、貴女方の方にこそ子供の求める材料が分る筈である。子供は知り度い。喜び度いのじゃない。子供は鑑賞したい、楽しみ度いのじゃないのであります。子供の心の動きは、凡てに向つて知り度いのであります。慾求心の満足であります。殊に子供のあの發育時には凡てのものが疑であります。人世は驚きから始まるに常に言つて居りますが、お互の生活の第一歩は驚きであります。非常な驚異であります。それが意識に上つて居るか居ないか分らないが、我々が母の胎内を離れて始めて浮世の空氣に曝された時には非常な空氣の壓力、それこ母の胎盤に抱かれた體温から離れて母の體の外に於ける空氣の溫度を感じる。これが直ちに我々をして呼吸こ云ふ事を起させるこ云ふので親こなつた者は非常に喜ぶのであります。子供の第一聲は驚きの叫びであります。貴女方もなかつたに違ひない。驚きに依て我々の人生が始つた。それから凡てが疑であります。凡てが怪しみであります。凡てが疑懼凡てが疑念、それであるから子供の生活は一切が疑こ驚きの生活こ言つても宜しい。此所に於てその驚きを克服する程度が大きい程、安全感が持たれるのであります。心に落着きが加はり安心が起

きる、それであるから何でも知り度い。實際彼等の満足ミ云ふものは、説明を加へた時に、彼等が何んなに喜びに眼を耀かして「チヨ―オ―チヨ―ダネ、ノ」ミ言ひ乍ら何の位満足するかミ云ふ事を考へて御覽になつたなら、即ち子供が安全感を増すのであります。

斯う云ふ事を考へて見まするミ云ふミ、話ミ云ふものゝ與へ方は、或意味から言うたならば安全感を増させる手輕な解釋になる。同時に彼等の満足を洵に簡單明瞭に與へる材料ミなる。それでありませうから話は、假に手輕い解釋を與へ、簡單なる理窟をつけ、さうして最も手つ取り早く満足を與へるものであるが故に、これは骨折らずに受取り享樂する所に話ミ云ふものを求める心の立場がある。彼等は幾らでも求める。彼等の心に受取れない色々の推理能力が働く、或は注意力が纏まらなければ受取れないミ云ふ話ならば彼等はあれ程求める筈はない。彼等に與へる喜びは簡單である。手つ取り早い現實である。

そこで話ミ云ふものゝ抑々の起りは疑の解決であります。疑念の除去であります。これが抑々の話の始りで、これが今日尙ほ裏書されるのは、世界に残つて居る童話：：所謂藝術品であります。童話の中にも、最も古い最も簡單な形式は大槪疑の解決であります。これが一番古い藝術の所産であります。だから藝術品であり乍ら尙ほ且つ疑の解釋、合理的な働きをしたものが今日童話ミなつて残つて居る。それは貴女方が古い民俗的な或は子供時代の昔の物を御覽になるミ、何故蛙のお腹は白いか、さうして脹れて居るか。狐の眼の縁は何故黒いか。何故熊の身體は黒く喉輪が白いか。何うして春ミ夏は日が永いか。段々進めるミ、支那は西北に山があつて東南に河がある。斯う云ふのが、知識の程度、理解し易い範圍に於て解釋される。何故楊子江も黄河も東南に流れ込むかミ云ふ様な地文的な地質學的な問題迄も疑の材料ミして解決を求める時は、民俗が低く頭腦の働きの低いものでありますからそれは何故かミ云ふミ、天を支へて居つた四本の柱の一

本が折れて途中でぶら下つて居るのを、或男が頭を打つゝけてその柱が崩れた。さうしてそれが埋つた爲に東南が下つた爲に反対に向ふの方が上つた。それで西北の方に山がある。天の柱が落ちた爲に東南の地面が下つたから楊子江も黄河も東南に流れた。斯う云ふ問題迄も話の疑を起した人間の頭の程度に依て解釋されて「あゝさうか。それで成程東南は下つて西北は上つた……」これで彼等は満足し、これで彼等は安心したのでありませう。

それでありますから斯う云ふ事を考へて參ります。貴女方が古い書物を讀む時に、幾つも／＼さう云ふ様な材料を見出す。殊に日本の古事記等を讀んで見るに澤山さう云ふ材料があるのであります。それでありますから、例へて言うて見ます。何故生きた人間は死んだ國に行かないか。これ程死ぬる者が居るのに何故人種ゴネが盡きないだらう。その何故、何うしては、問題は人の生命人の運命に關はる問題だけれども、この何故何うしての問題は、何故狐の眼の縁は黒いか、何故猿の顔は赤いか、云ふ疑と同じ疑であります。それに對するその時代の知識程度の發育段階に隨ての解釋が、今日醇化された藝術品になつて残つて居るものが童話の形式で今日迄我々の間に傳つて居りますが、それすら疑の解決であります。所が人間は疑ばかりの解決で満足するものぢやない。

茲に第二段の心の働きが出るのであります。それは何んな働きか云ふ。第二段は、それなら斯う云ふ事は出来ぬだらうか、それなら斯う云ふ様な事にしたならばよさうなものだ、云ふ希望云ふものが起る。そこでその望を遂げさせる方法手段云ふ様なものに暗示を與へ解決をつけるのが話の一つの狙ひ所であります。

第一段は疑の解決……寧ろ第一段から言うたら事情の説明であります。第二段が疑の解決、第三段が希望……望を遂げる、希望慾求の満足、或は慾求を遂げる所の方法方法を暗示する所のもものが彼等の求める話の材料になる。斯う云ふ様なものである事を考へて見ます。話云ふものはさう云ふ素質を持つて居るものであれば何でもいゝ譯になります。さ

うして見るに幼稚園の生活の如きは、凡ゆるものに注意力を集注させなければならぬ時であります。殊に今日の都會生活の子供、幼稚園で一番考へなければならぬ。保育の要目は注意力を集注させる。今日の家庭の缺陷は注意を求める事が出来ない事でありませう。それで小學校の教職員が幼稚園の保育を疑はれる點は、注意力が散漫であるに云ふ點であります。これは自由保育に云ふ言葉を解釋し損ね、勝手次第な我儘を發揮するのを自由保育に解釋を誤つた爲に、彼等は一つのものに注意を向け、一つのものに共同的に考をつける事が出来ないに云ふ幼稚園保育の悪習慣が附いたのであります。幼稚園保育が悪いのではない。保育者の解釋の誤から出た悪習慣が、小學校に行つて、幼稚園から來た者は注意が散漫だ、先生に注意しない、黒板に注意しない、與へた問題に注意しない、に云ふ事になるのであります。

私は斯う云ふ事を考へても、私共の現實に於ける保育の最も狙ひ所は、彼等の注意を集注せしめる、私は、注意を引かせるに云ふ上から、凡ゆるものに對する解説を加へてやる。それであるから、ほんの……木の葉がひら／＼落ちるのにも「何うして先生木の葉が落ちるのでせう」、「さうだね、段々寒くなつて上の方に居つた所が詰らない。今度來年になるに土から芽が出なければならぬ、それで蒲團を着せて暖かくして、ひら／＼木の葉が落ちるに蟲や何かが、これならば芽を育て、やりませうに待つて居る」斯う云ふ様に、何でも宜しい。凡てのものに意味があり。凡てのものに心があるに解説を加へてやつたならば、子供の注意力は如何に小さいものにも向けられる。私は斯う云ふ點に、幼稚園の話に云ふものを根本から立直して來る必要に迫られて居る次第だと思ふのであります。

時間が少なうございますから、さうも飛々に申上げるより外、仕様がないので誠に残念に思いますが、以上申上げました處で話に云ふものに就ての意義、幼稚園の話の範圍、並にその解釋にでも云ふ様な意味に御取扱ひ下さつてもよいと思

ひます。

今度は誠に時間が少いから話方の方を申上げて見ませう。その話方は三通り話方がある筈であります。これは御同様常にやつて居る事でありますが、何う云ふ譯か話方ミ云ふミ耳に話掛ける話方を——聲を持つ、言葉を以て耳に話掛ける話方——だけを話方ミ心得る事はなんミ云ふ誤りだらうかと思ふのであります。私は耳だけに話掛けて居るラヂオ放送は、これは嚴密に耳だけでありませうが、貴女方はラヂオ放送を御聞きになつて何の位印象が淡いものだらうか、物足らぬものであらうか。眼を御使ひになる、顔を見せて話をする、この二つの印象の効果ミ云ふものは殆どこれを使はないラヂオ放送ミ較物にならぬでありませう。何故、顔を見て聞く、その人の姿を眼にし乍ら聞く事に就て満足が大きいか。それは受取る處の分量が多いからであります。受取る處の分量が多いミ云ふ事は、自分に徹底する處の強さに於て較物にならない程の度が厚いのであります。それであるから眼で見、その姿を我前に描き出してさうして聞く事の出来るものは非常に受取る處のものが受取り易く徹底味が強い。さうして見るミ私は耳に話掛けて語つて居るミ同時に、眼に如何に話掛けて語つて居るか、ミ云ふ事も解るのでありませう。同時に私共の呼掛けるものはもう一つある筈であります。それは心に話掛けて語つて居る。で話方を此處に假に分けて見ますならば、耳に語る話ミ、眼に語る話ミ、心に語る話ミ、三つある筈であります。

然るに大體の人はその耳に語る話方のみを研究の對象とする。然し斯くも子供に對する限り、純真無垢な子供に對する限り、殊に彼等の推理能力の發達する幼稚園年齢の子供に對する限り、此時代の子供の持つ最も強い力は何であるかミ云ふミ、直覺力であるミ云ふ事は貴女方が始終御體驗なさる事でありませう。直覺の心理に就ては幸によい書物が出て居る。青木庄左衛門ミ云ふ方が「直覺心理の研究」ミ云ふ書物を出して居られますから、之は御承知の方もありませう。之は

御覽になつてもならなくとも、日常の生活に於て幼稚園程度の子供は如何に直覺力が鋭いか、その直覺力は直ちに心から心に受取る處の働きであります。曰く言ひ難しであります。何等の推理的な働きを加へず、何等特殊な注意力を持たずに直ちに心に(象じ)ラクターに受取る處の智力が之がこの直覺力であります。その直覺力を吾々が使ふ事が出来きたならば、之を働かせる事が出来たならば、何の位樂に話し得るか、即ち心に語り得る言葉云ふものが何の位大事なものであるか、云ふ事が御解りであります。

其次には耳に語る言葉よりも眼に語る言葉であります。幼稚園の子供程、釣合を自然に感ずる者はない。歪んで居るか、歪んで居ないか。真直いか、真直くないか。正しいか正しくないか。美しいか美しくないか。斯う云ふ點に就ては幼稚園の子供の審美眼はなまじ、理窟に歪められた大人よりも遙かに端的であります。鋭いものであります。直ちに中軸を衝くものである。其點に於て先づ子供に語らんとする保母諸君は姿勢、態度云ふものが一番彼等の前に吾身を現した時に考へなければならぬ、話方の第一の心掛けでなければならぬと思ふ。如何なる態度をこるか、如何なる姿勢で子供に向ふか。先づ姿勢態度を決める處の材料が貴女方にありますから、子供に語る材料としては先づ精神的に言ふならば覺悟が必要であります。具體的に言ふならば姿勢に注意せなきやならぬ。處がこの覺悟姿勢、兩方とも之が正しく子供に一つの壓力を以て彼等の智力に訴へて居て、聞く可き先生だ、語られる先生だ、云ふ感じを與へるのに、一番大事なのは材料を確實に握つて居る云ふ事であります。材料の把握、箇條書に書いて見ませう。

覺悟  
材料の把握  
姿勢

材料の把握云それからそれを自分がよく消化して居るか、何うか。それからそれを自己がよく裁つたり切つたり繼ぎはき



をしたり、自分が自由に取賄ふ。だから材料を先づ完全に握つて居るか何うか。材料の把握、その材料をよよく自分が合點し解つて消化して居るか何うか。さうして夫を自分が思ふ様に自由に取扱へるか何うか。消化こなせるか何うかであります。之が完全に出来上つて居れば自然貴女方の覺悟に悠揚ゆうやうとして追らざる態度がござれませう。従つて腰に落着きが出来て子供の前に座つた時に自らその姿勢が悠然たるもの、泰然たるものがありませう。譬へて之を例をみますならば、馬に乗つて將校が向ふから來た。(以下手眞似てまねと共に説明)手綱をこつて居る。その手綱の取方でも「シャンコ〜」手綱を引いてやつて來た。斯う云ふ事はよく普通に使ふ言葉でありますが、今の大將の馬に「シャンコ〜」飾りをつけた大將の馬がありませんでせうか。「シャンコシャンコ〜」之は昔の小荷駄馬であります。今から六七十年前の馬であります。その鈴の聯想が今、吾々の聯想に残つて居るから、直ちに鈴の音から乗つて居る馬を聯想する。子供に「シャンコ〜」と言ふたつて今の子供には解らない。「こりやあ、一體何だい」云ふ事になる。手綱をみんな風を持つて居るであります。吾々は何も眞實の通りにしなければならぬ云ふ事はないが、馬に乗つて居る人を注意して見るならば、「シャンコ〜」の代りに「カッポ〜」云ふ馬の蹄の音こそ、近頃の鐵蹄を打つたあの蹄の音が吾々に残つて居る。それで「カッポ〜」(身振にて説明)この態度を持つならば、斯う云ふ話方をするならば大將であらうか別當であらうか云ふ事になりませう。さうする云々の云々(身振にて説明)意識しては此方が違ふ。此方が正しいと思はれないけれども、自然にその消化が馬の境遇を非常に思はせる。子供云ふものは氣が付いて居ない様であるが頭の中に握つて居るものがある。電車を描かして御覽なさい。大人の氣が付かない、目の届かざる肝心の點を握つて居る。意識して居る部分は少いと言ひ乍ら彼等が現はす時は自らに眼を通して頭に入れた一つの形を握つて居る。子供は模倣性が強いだけに自然にその形を握つて居るものであります。心の姿に——心象に形を握つて居る。こんな事をしてやる(身振)「お馬そんな事しやしな

「子供と先生と違つて居る。先生が斯うして(身振)行つた時に馬に乗つて居るらしく子供に受取られる筈がない。これだけは要するに消化の問題であります。貴女方が汽車から降りて、或は其處で物を賣つて居るさか云ふ様な、その通りを(身振)全部、吾々藝人でないから始めから終ひ迄眞似をする必要はないが、子供の想像力を起させる絲口として、ものゝ呼聲、ものゝ形、ものゝ名、色さ云ふ様なものを少うしは使ふ必要がある。それだけは如何に消化して居るかによつて之が極まる問題である。把握、消化、材料此三つが充實して居るならば、貴女方の態度、姿勢、心構へさ云ふものに落着きが出来て來ますから自然子供の前に於て、悠揚たる身構へになつて、之が要するに語る言葉になつて如何に子供をして信賴せしめるかは之は恐ろしいものである。

それから今度は次に心に語る言葉、眼に語る言葉さ云ふものは貴女方の腰掛け方、其他椅子の位置、色々ありますが、之も細かく言ふならば、部分的に色々ありますけれども、時間がないから一つだけ貴女方に御願ひしたいと思ふ事がある。それは腰掛けられる時に、あの幼稚園で話をされる時に、立つて話をして宜いが、出来るならば幼稚園の話は腰掛けて膝の廻りに近く寄せて話す、さ云ふのが私は一番理想的だと思ふ。子供の頭に手が觸る程度の距離で話す。多勢の子供を遊戯室に入れて皆な一緒にして話すさ云ふ事は餘程心掛けのよい人で餘程壓力の強い人で餘程話方の上手な人でなければ徹底し憎いのであります。お話を聞かせる時、何か注意を與へる時、出来るならば腰掛けて居る膝の廻りに集める。その腰掛方の一つだけ、随分諸君御婦人さして不満な點は椅子の下に足を入れる事でありませぬ。恐らく大抵はこの姿勢(足を椅子の下に入れる)じやありませんか。まあ前にお出しになつて居る方も多い様でありますけれども、この姿勢程、不安定な姿勢はないのであります。腰から下が決まるさ云ふ姿勢程子供を安定せしめるものはない。腰から下を決めるには膝を延ばす事でありませぬ。この姿勢であります。(椅子に腰かけて説明)斯くも膝から下した垂線、その垂線より前に足

を出す位な位置にお掛けになる。この姿勢はその爲に子供の眼に呼掛けて安定なる位置として合點が行く。と同時に貴方方まで、斯うして(足を下に入れる)話す時のその心持も、斯うして(足を延ばす)お話になる心持は確かに違ふ筈であります。それありますから保育室に於けるあの指導者の腰掛けて居る椅子の高さ云ふものは之は微妙なものであります。有合せの椅子を取つて直ぐ取つて、腰掛けて話す事は不覺悟だと思ふ。先づ自分の位置を正しき位置に置き、自分の身構へを充分確かりした身構へにして腰掛けたならば、その腰掛けた姿が子供の眼に呼掛ける力は偉大なものであります。要するに心に語り、眼に語り得るならば、それから先は耳に語る位の事は雑作のない問題であります。然るに耳に語らう、耳に語らうのみ考へて先づ心に語る事を知らず、眼を撫<sup>ツカ</sup>へる事を知らない爲に骨折る事多くして効果が上らない。今後貴方方が人の前に立たれる時、椅子に腰掛けられる時、先づ自己の立場、姿勢、足の下げ方を決めて御掛けになる事が必要である。私が此處に立つて話をする(壇の前端に立つて説明)貴方方に近い。私の顔が前に出て……すぐに身體が前に落ちさうになる。之で頻りに話をして居る。私に安定があると思ひますか。之じや實に危なつかしくつて仕様がなない。よく演説等をやられる人は始まりは此處で(正面中央、挨拶をして居るけれども、段々前に出て来て(端に立つて)「諸君!」斯う云ふ調子でやつて居る。(笑聲)あれは耳に聞かして居る。貴方方に與へる印象は甚だ薄弱だ。話す人が強い言葉を使へば使ふ程その價值が疑はれる様な氣持がする。従つて今度御歸りになつて教育報告をなさる時でも、此處(壇に御上りになる。御婦人は斯う云ふ所に立つて(場所を指示して説明)遠慮氣味で斯う云ふ調子で御話になる。之は禁物であります。何卒壇の上に乗るならば一米多く上らうが二米多く上らうが同じ事である。餘り遠慮なさらずに向ふから一、此方から二位の場所の釣合をこつてその安定が宜しい、云ふ所に立つてお話になれば落着きを認められる。だから話の内容にも深みを覺えるのであります。チヨコくこ此處に出て来て「私は今日此處で……」(笑聲)如何にも小さく見える。

話の内容はいゝかも知れませぬが、この姿勢ミ云ふものは大事なものである、ミ云ふ事が御解りになりませう。其處で獨唱家等がステージに立つ時の足を氣をつけて御覽になつて見るミ、それによつてその人の覺悟姿勢ステージ慣れして居るか居ないかミ云ふ事が貴方方に直ちに解る。ニューヨークから來たガリクルチミ云ふ女史の如きはドレスを着て居るからではありませんが、此ステージに立つた時に兩足を踏み開いて居る。裾模様をやつたら大變なものでありますが、兎に角に十間なら十間の舞臺に立つて一人の獨唱家が一ぱいになつて見える。心に呼掛ける力は此處にあるのであります。足、腰から下にあるのであります。斯う云ふ點は殊に子供に對しては私共が餘程考へてかゝらなければならぬのであります。この位置、要するに呼掛ける處の吾身體の位置、その形ミ云ふものは餘程御注意を願ひ度い。

それから第二に、貴方方に求める點は手を動かす場合に、肱から下で形容をなさるミ云ふ事は之は非常に姿を小さからしめ、肩から動かすミ之は子供の心、或は眼に呼掛けるのであります。肱から先でやるミ早くも行きますが、小さい。肩から行くミごんな小さい形容をする時でも「向ふムコウの方から見まして此方の方に來ます(手振にて説明)又向ふの方から來ます。ずーミ左の方に來ます」(手振)この話が小さく見えるか大きく見えるかであります。「何卒此方へ」(小さい身振)「何卒此方へ」(大きい身振)肱から先を使つたならば實に見苦しい。肩から使つたならば大きくなる(身振)肩から大きく持つて行くのであります。(身振)此處迄は何をするのか解らぬ。丸か四角か、平たいか解らぬ(身振)此處迄手を持つて來たならば、それから形容するのであります。「まんなら」であります。それは一寸した眼に這入つても解らぬ様な小さいものです。之だけです(身振)この肩から動かす、この習慣をおつけになつて御覽になるミ貴方方が子供に對しても大人に對しても、貴方方の姿勢はゆつくり見える。大きく見える。落著いて見える。要するに美しく見えるのであります。さうして子供はよく指を使ひませう。「僕二つ」「僕三つ」幼稚園はよく指を使ふ。私共はつひ釣込まれて料理屋に行つて「二人前だよ」

指を使ふ。(笑聲)之(指)を使はないミ解らない様な氣がする。お互小さい者を相手にして居るものゝ共有性です。その指を使ふ時に之を早く使ふミ見苦しいのです。指を使ふ時に早く使ふミ誠に眼に呼掛け心に呼掛ける力が薄くなる、淺くなる。「向ふの方から來ます、此方へ來ました」(指を動かして説明)之を早く使ひますミ大變賤しくなる。「皆さんを可愛がつて、皆さん寢て居る間も心配して居るのは誰でせう」(指で早く示して)「この先生」この先生がおつちよこちよいに見える。それを長くゆつくり大きく使つて御覽なさい。「皆さんの寢やすんで居る時も皆さんの事を考へて居る先生が居ますよ。誰でせう」あつ、それはこの先生です」(大きく指示)この先生が大きく懐しい先生になる。「それはこの先生」(早く指示)(笑聲)この指は實に大事なものだから、めつたにそんなに貴女方御使ひになりますまい。けれども世の中の演説される人がこの指を使ふ事がある。早く使はないミ可笑しいミ思つて使ひますが、凡て態度、動作は、餘り手振は、早く使ふならば見苦しい、ミ云ふ事を覺えてお置きになつたらば宜しい。ゆつくりミ間延びした位にお使ひになれば決して品位を落さない。それから身振は肩からお動しになれば決して賤しくは見えないが、肱から先に動かすミ可笑しい。之は遊戯の講習にも必ず二つの型があるミ思ふ。肩から動かしてやつて居られる方ミ肩は其儘にして手を動かす方ミある。之は四十を越した老保姆の方が「鳩ポッポ〜」(手振)それは可笑しい。寧ろ儉約せずに大きく之で(肩から動かす)やられる方がよい。今日氣をつけて御覽なさい。あれは肩から動す。あれは肱から動す、ミ云ふ事がよく御解りになります。肱から動してはどんな遊戯をやられても子供には誠にきこちなく、そして貴方方には甚だそれは非舞踊的であり非遊戯的であります。之は演壇に立つ態度も、話方の子供の前に座る姿勢も、遊戯の動かし方も同じ事であります。此の肩から動くミ云ふ事であります。

其外にはもう別に貴方方にその眼に語る言葉ミ云ふ意味に於て申上げる事はないミ思ひますから、後僅かの時間で耳に

語る言葉即ち聲と言葉と云ふ問題を申上げておきませう。第一此處に耳に語る言葉で一番困る問題は子供のもつて居る言葉の數で、大人が持つて居る言葉の數が違ふと云ふ事でありませう。數が違ふと云ふ事と同時に之を出す處の知識經驗が違ふと云ふ事でありませう。「よう言はんわ」と云ふ言葉を關西の方が使ひます。之は甚深微妙にして曰く言ひ難し、こでも使はれるであります。或は此頃「ちこ憂鬱だわ」と云ふ様な大人にはこの意味はよく解る。色々に變化して使はれる。子供には之を解釋する基礎知識がない。子供の持つて居る、一番吾々が考へなきやならぬものは子供の語彙、言葉の種類それがさんなものであるかと云ふ事でありませう。處が此處に幸ひに丁度幼稚園程度の子供の持つて居る言葉の數を調べられた久保良英博士、廣島の文理科大學の教授が日本の子供の満二歳から満六歳迄の統計が擧つて居りますから之を御參考迄に書いておきます。満二歳の子供の平均の言葉の數

満二歳 一六五

同三歳 四六一

同三歳半 七〇一

同四歳 九八一

同五歳 一二三七

同六歳 一三六四

之は母親の知識の程度、その子供の家庭の程度、さう云ふものによつてこの言葉の數や種類は違ひますが、まあ日本で今日迄調べた處によるに、之が一番標準になつて居つて、松本亦太郎博士も之を引用されて居りますし、その他博士や學士の人にも引用して居られますから、先づ間違ひないものとしまして吾々も之を標準にせらなければならぬ。御承知の通り満六

歳で一三六四だから吾々が扱ふ子供ミ云ふものはこの範圍の言葉しか持つて居ないのであります。此處で一寸説明を要するのは満三歳ミ四歳ミの間に三歳半の七〇一ミ云ふ特殊な數字が出て居る事であります。之で御解りになりませう。人間一生涯の言葉ミ云ふものを習得するその率の一番多いのは満三歳から四歳の間である事が御解りでありませう。一體幼稚園年齢の時程よく言葉を覺える時代はないミ云ふ結論になるのであります。子供の言葉を覺えるミ云ふ事は非常に廣い範圍の知識を確實に握る事であります。それでありませうから一つの言葉を正しく覺へさせて、正しく使ふミ云ふ習慣をつける事、或は一つの言葉を覺えさしてそれを利用させるミ云ふ習慣をつけるミ云ふ事は餘程考へなければならぬ問題でありませう、一つの「水」ミ云ふ言葉を覺えただけでも冷い水ツメタミか飲みたいミか流れるミか或はそれは川にあるミかコップの中に這入つて居るものだミか井戸の水であるミか色々關聯した意味、働きになるものでありますから一つの水ミ云ふ言葉を確實に覺えるミ云ふ事は子供の知識、生活の範圍に於ては非常に廣さ、範圍を纏める事になる。此處に簡単に言ひませう、満三歳から四歳迄の間は他の年の一年間に覺える言葉の數を半年に覺える。それであるから三歳から四歳迄の間は他の年の二年分を一ケ年に受取る時代であります。聞き囁りをすぐに口にし何でも一寸耳にしたものを言うて見る。之は微妙な人の働きでありませう、之は貴方も御記憶なさつていゝ事で「憶へて置かう、之は記憶しておいて他日使はう」ミ云ふ材料は聞いた時にすぐ友達に話して見る事です。自分が耳から聞いたものを口に出して語つて見る。之程記憶法に簡単な確實なものはないのであります。活動寫眞を御覽になつて感銘、興起する事があつた、説教を聞いて今夜のテーマには社會生活によいものを與へられた、ミ云ふ時はその歸途、寺から出る歸りの石段の降口で、或は道路で自分の友達に女中でもよし、それを話して見る事がよい。一度口から出して置くミ之程、簡単な記憶法はないのであります、子供が満三歳から満四歳迄の間に如何によくおしやべりをするかミ云ふ事が御解りでありませう。お父さんがお隣の小父さんミ話し

て居るのを聞き囁つてそれを平氣で妹に使つて見たり、お母さんに「母さん今日はかなり暑いね」何處かで「かなり」云ふのを聞いて、意味は解らぬが耳から聞いた事を直ぐ口に出して見る。之があゝの時代の特徴で従つて彼等の記憶力はこの時代に非常に加へられる。此處に私共が考へて見なければならぬ問題は、この位の程度の子供の言葉の数を此位であるとして之に話掛ける吾々の言葉の数は何の位でありませうか。之は日本で調べたものはありません。ロザノフ云ふ學者が、コロンビヤ大學のロザノフ・カートリック云ふ人の調査によります。先づ普通人が一萬千七百語を語る。それから大學生所謂特別な高等知識を修得して居る大學生が二萬百二十語を使つて居る。斯う云ふ事を言うて居る。さうして見ます。普通人が一萬一千、大學生が二萬とします。一萬五千云ふものが大人の日常使ふ言葉と考へて差支ありますまい。一萬五千の言葉を持つて居る大人がその約十分の一の千三百しか持たない子供に話をする。云ふのには餘程吾々はハンディキャップ云ふものを持つて居る。云ふ事を考へなければならぬ。吾々の一萬五千の言葉の中から千三百の言葉を拾ひ上げてそれを使はなければならぬ。之程面倒な事はありませんが、最近九州帝大の豊田云ふ博士が雜文の中に斯う云ふ事を書いて居られる。ニューヨークのベル電話會社——私設ベル會社——が調べたものに面白い統計を出して居る。五百通話を材料として、其等の五百通話で男が八百八十話して女が百二十話した。その八百八十三百二十その男と女の通話の中から言葉を何の位彼等が使つたらうか。電話で話すのでありますから或は商用もありませうし或は工業用、法律もありませうが、彼等の電話に使つた言葉を拾ひ上げて見る。その五百通話、人間にして千人のその言葉の中から拾ひ上げた言葉は二千二百四十語で話した。云ふ事が解つた。その二千二百四十語の中に八百十九の言葉云ふものは、つた、一度しか使はなかつた。だからつた一人が一度使つた事でありませう。その二千二百四十語の中から八百十九を引きまします。云ふ、残り千四百二十一であります。さうする。千四百二十一の言葉は皆なが五百通話



の中で使つた言葉であります。さうして見るに結論としてベル會社の發表した處によるに、人間の用談に云ふものは餘程特殊なものでない限りは千四百語の範圍で樂に用事が足せるものだ、云ふ事を豊田博士が發表して居るのであります。

私共は此處に於て私共の結論を得た様な氣がする。電話で話すに云ふ事は相手に解らせるに云ふに一番頭を働かす。その解らせるに云ふ事は用事は随分難しい用事があるに違ひない。併乍らその難しい用事を僅か千四百語で話すに云ふ事を考へたならば子供を持つて居る言葉千三百の言葉は大人は少うし考へたならば彼等にかなり難しい事を解らせ得るではなからうか。斯う考へて見ますに云ふに、吾々は言葉に云ふものを如何にもつゝ眞面目に吟味しなければならぬか。考へなければならぬ。然るに吾々が子供に向つて話をする時には吾々の日常使つて居る、吾々の知識で理解し得る言葉を平氣で話す。之を子供が誤解するに云ふ事は、誤解させるものが悪いか誤解するものが悪いか。この點に於て恐ろしい罪を重ねて居る事を考へるのであります。殊に子供は似た言葉の響きがあるにそれを直ちに混線させる癖がある。「先の帝の御車は果ての在でましあらせらる」に云ふ唱歌を「先の帝の荷車は果てのいでましあらせらる」御車が荷車になつて居る。彼等の知識に御車はない事であつて、荷車ならば彼等の日常生活にある。御車等は彼等の體驗せざる、彼等の持合せのない言葉であります。直ちに持合せのないものは解らぬので持つて居る似た響きに變つて了ふ。勅語奉答の歌を尋常一二年の子供が「露も坂かじ朝夕に」を、「露も寒風朝夕に」に歌つて居る。「つゆも坂かじ」なんに云ふ言葉は彼等の普斷使はない言葉で「寒風」に似た音に變つて「露」に云ふので「寒風」に言へば子供にはよく解るのであります。之が勅語奉答になるかならぬいかは一向問題にならない。さう云ふ混雑を起させる事を吾々は考へなければならぬ。子供に受取つたものは全く違つたものに受取られたならばそれは與へるものゝ罪であります。斯う云ふ事を考へて見ますに、言葉に云ふものは吾々餘程吟味しなければ不可ない。

一つ最後に附加へて置きませう。殊にこの言葉を御婦人が御使ひになる時に呼吸が充實して居ない。呼吸の問題であります。呼吸が充實して居ない。之は姿勢が悪い。空氣の逃易い様な上半身の角度をこつて居られる。前屈みになつて胸に壓迫を加へる。精神的に充分な準備がされて居ない、消化が足らない、自然に落著きがない。それでありますから御婦人——御婦人と言つては失禮であります、人に話をする時は呼吸が充實して居ない。呼吸が充實して居ないが故に聲に壓力が加はらないのであります。聲がかすれるのであります。聞きこり難いのであります。斯う云ふ點を御考へになりましたならば、話方に姿勢云ふものが何の位大事なものであるか、覺悟が何の位大事なものであるか云ふ事が解るでございませう。

其處で最後に一つの祕傳を御教へ申上げてこのお話を終り度いと思ひます。それは子供に對しても大人に對しても貴方が誰に對しても、吾が心を傳へよう、外の者に自分の意志を傳達しようと思はれたならば、言葉を傳へる時は、先づ顎を引く、云ふ習慣を付けられる事であります。「一寸顎を引いて下さい」「一同顎を引く様に」すつと姿勢が眞直になりませう。顎を引くと同時に自ら自分の肩が高まる。「顎を延して下さい」「一同に」同時に胸が屈まる。處が御婦人の姿勢は肩が下り易い。斯うする(顎を延ばす)呼吸に壓迫を感じる。此處で顎を引く、云ふ習慣をおつけになる。胸顎を引いて御覽なさい。さうして「皆さん」と言つて御覽なさい。「皆さん」といきなり呼掛けるの顎を引いて「皆さん」(實例にて説明)此時に貴方が御自身の強み弱みに於て明かに等差のある云ふ事に御氣付きであります。「皆さん顎を出して御覽なさい」「皆さん顎を引いて御覽なさい」(一同に)之はもう一つ此處に例を言ふならば東郷元帥乃木大將、乃木大將云ふ方は何となく慕はしい、懐き易いお爺さんの様な氣はしませぬか。東郷元帥云ふ何となく謹嚴そのものゝ如くで、寄りつけない様な感じを持ち易い。寫眞を拜見して私にはさう云ふ感じがするのであります。所が事實に於てです。乃

木大將程よく吐言を言はれた大將はないのであります。中々之は難しいお爺さんおじいさんで第一聯隊長としての時代は若い將校等はピリ／＼して居つた。却々理窟の多いお爺さんであつた。所が東郷元帥とうこうげんすい云ふ方は決して吐言を言はない。何にも言はれない人なんです。處が誰が考へても乃木大將は親しみよく懐き易い様なつかであり、東郷元帥は近付き難い。何さなくさう感じられる。其の基く處は何處にあるか。顎の問題だけである。東郷元帥の姿勢(顎を引いて)御寫眞をよく見て御覽なさい。乃木大將の姿勢(顎を延して)斯うして居られる。之は私は自ら明治三十六年三笠艦に御訪ねをして「愈々これから戰爭になりさうでございますが私共國民は何う心得たら宜しうございませう」伺つた時に、部屋の中に這入るこ出て來られた時がもう之(顎を引いて)です。だからもうぐつこ抑へつけられる様な、咽喉のかたまりが出來てものが言へない様な感じですよ。乃木大將の御寫眞を御覽なさい。之が(顎)斯う出て居る。那須野の開墾に、蹶の柄に手を載せて斯うして居られる。片瀬の濱で鉢巻をして立つて居られるのも絶えず顎が出て居る。力が抜けて居る様な樂な氣がする。顎を引くミ如何にも恐しい近寄り難い様な氣がする。この顎を引くミ云ふ事は自己の身を守るについては一番簡單な態度であります。それでありますから子供が人に寄りかゝつてものをねだる時は斯う顎を出すでせう。「よう／＼いゝでせう」(顎を出す)此時にお父さんが拒む時は之(顎)を出して拒むか云ふミ必ず顎を引いて拒む「そんな事を言つても不可ぬ」(顎を引いて)この顎は呼吸の調節に大變に役に立つものであります。顎を出すミ呼吸が逃げる。顎を引くミ咽喉の角度が「く」の字になる。或は「へ」の字になる。肺臓から出て來ます呼吸が咽喉によつて調節されます。話して居る間に時々顎を出すが宜しい。出さうき思はずきも自然に人は樂になりますからその時、時々「顎顎」ミ斯う思つて時々顎に歸る。その顎に歸る云ふ呼吸の調節が非常に樂になりました落著いた聲が出来る。落著いた呼吸が出来るのであります。之は誠に微妙なものであります、私が三十何年の長い間の體驗からやつこ得られました一つの秘訣は顎に氣がついた事でありました。始まり

は子供の前であらうと人の前であらうと吾身體をもつて人に呼掛ける。眼に語る。始める時は先づ肩に氣をつけろと云ふ事を過去三十年氣をつけて來た。肩が崩れたり、肩が流れたりするは品位がない。壇に上る時、人の前を通る時、肩に氣をつける。肩に餘り氣をつけるは強くなり過ぎますが(肩を張つて説明)(笑聲)。

肩に氣をつけるは云ふ事は前から自分も心得て居りましたが、肩を以てして未だ足らない。顎を引く事が大事です。それですから今度この講習を御聞きになつて歸つて御話をなさる時に、お話を始める時に先づ顎を引いて立つ。さうしてお辭儀をしてすぐものを言ふのが大概の癖であります。之が大間違ひであります。すぐものを言ふ時程、人の注意の集注して居る時はない。この時にこの姿勢は弱い。顎を引く。段々身體が軟らかくなつた時に顎に氣をつけてぐいぐいと引きつけて行く。話は心に語るもので耳に語るのは部分的の作業であります。況んや純真な子供に語る話の如きは心を以て心に語る。滿腔の同情を持ち子供が何うかその彼等の第一歩を履み誤らせたくないと思ふならば、何も藝術的な作品の話をおかせずとも、さう云ふものによつて彼等の満足を買はずとも、身の廻りにも幾百千の話題を持つ事が出来る。著音機のある盤によつてぎの位の時間ぎの位の話が出来ると云ふ事は御經驗になつて居りませう。あの一面が廻るのは三分七八秒に廻るのが丁度頃合であります。それを考へると三分の間にあれだけの話が出来ると云ふ事を御考へになつて見ますと、私共は如何にこの話と云ふものは、言葉で話す事は樂であるが、それよりも心に話し、眼に語る事の方が重大な話であるかと云ふ事を御理解を願ひ度いと思ひます。二時間の間にありましたが、語つて盡さず、ほんの部分的な話でございましたがよく御清聴下さいまして有難うございました。(了)

(文責在編輯部)